



経営の散歩道

一〇五回

川中経営所長 川中清司

元禄五年十二月十四日、吉良の邸に討入り上野介の首級をあげた赤穂浪士を、承天和尚は寺に入れ温くもてなす一方、上杉方の反撃に備えて門を堅めた。

◇ ◇ ◇

▼泉岳寺の境内は、墓も雪化粧して静かだった。

吉良上野介の首の包みを解き井戸水を汲んで洗い、内匠頭の墓前に備えた。

香炉から立ちのぼる香煙がゆれる。浪士達はその香りに、宿願を果たして今、亡き殿の墓前にいる確かさを感じとっていた。

あらたのし 思いは晴れつ身は捨つる 憂き世の月にかかる雲なし

内蔵助はこの時の心境をこう詠んでいる。

墓前に一同が平伏する中で、内蔵助はかねてしたためておいた書面を懐中からとりだし、声高らかに仇討ちの本懐を上げた旨を読みあげた。

短刀で首を丁ちようと三度打ってから

「殿から拝領致したこの短刀にて、吉良殿の首級を討ちとりました。只今お返し申しあげます。何とぞ、お手づから十分に無念をお晴しなしますように」

と言うと、嗚咽の音が男泣きの渦となって広がっていった。

内蔵助はやおら一同を振向き、「各々方には、それぞれ充分なる働きにて、もとより優秀はござらぬが、上野介に一番槍をつけたる間十次郎、次に竹林唯七から焼香されるがよい」と促した。次に自らも焼香し、



赤穂義士と萬慶寺

その2

一同が順々にその後続いた。

承天和尚は、浪士を見守りながら静かに、法華経の観世音菩薩普門品を唱えた。

▼墓参を終えて承天和尚は、急ぎ口上書をしたためて奉行所に趣いた。

このままでは上杉方の反撃が懸念される。何としても赤穂浪士を守らねばならぬ。公儀の力を貸りて泉岳寺を堅めねばならない。

昨十四日夜、浅野内匠頭家来・浪人が、亡主・内匠頭の仇吉良上野介殿宅に乱入仕り候いて、上野介殿討取り、拙寺へ今朝六時前にまかり越し、亡主内匠頭の廟所へ手向け度く候間、

その意にまかせ候うえ、浪人共に相尋ね候ところ、公命のうえにて切腹致したく候旨、先達し、仙石伯耆守殿へ、一(省略)申上げ候由、申し聞き候。右之段御届申上げ候。

泉岳寺病氣に付

廣岳寺 承天

寺社御奉行 御役人中

承天和尚の願いが聞きいれた。奉行所は直ちに御徒目付二人、御小人目付四人のほか與力、同心を合せ二百余人が、さきに自首した吉田忠左衛門と富森助右衛門を守りながら泉岳寺に急行し、警護を始めた。

▼奉行所から戻った承天和尚は、大石内蔵助に昨夜の討入りの詳細を尋ねるが、なかなか話そうとしない。重ねて

「ご謙退なさるのも道理なれど、寺社奉行から当寺に委細のお尋ねありし折にお答えできざれば困惑いたします故」

と言っても、内蔵助は無言のままである。

「暫くなれども皆さまを預りできたご縁は日本中で私共しかござらぬ。されど皆さまが謙退なされて話されぬとは世間の人は知り申さず。われらが聞かざりしものと相成り、それにては泉岳寺の辱恥となり、末代まで誹謗されまする」

と説得を続ける。

「かほどまでに心胆を盡され首尾よく大望をとげられ、その忠義まことの功名譽のさまを、後世に伝えざることは、甚だ残念千萬なことござる」

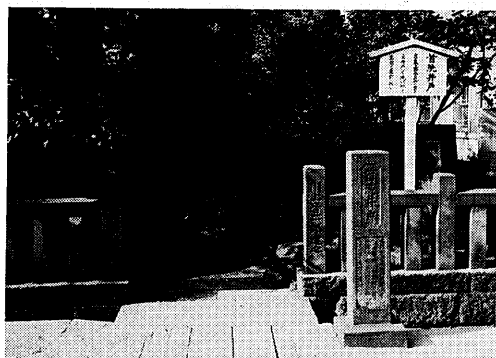
条理をつくした承天和尚の説得に、内蔵助もようやく口を開いた。

「われらのやった少しばかりの事を、自慢らしくお話し申すのも如何かと存しお断りして参りましたが、そこまで仰せられるのならば包みかくさずお話し致そう」

「拙者ひとりの話だけにては分らぬこともあり、ほかの働きは全員に語らせましよう」

一言も聞きもらしてはならぬ。承天和尚は自ら筆を走らせ討入りの子細を書き綴った。「義士夜討高名咄」として今に伝えられているのがそれである。

つづく



泉岳寺 首洗井戸